

# アルコール固定標本を用いた免疫染色の有用性

国際医療福祉大学成田保健医療学部 医学検査学科<sup>1)</sup>

国立がん研究センター中央病院 病理・臨床検査科<sup>2)</sup>

池田勝秀、梅宮敏文、山口良考、澁木康雄

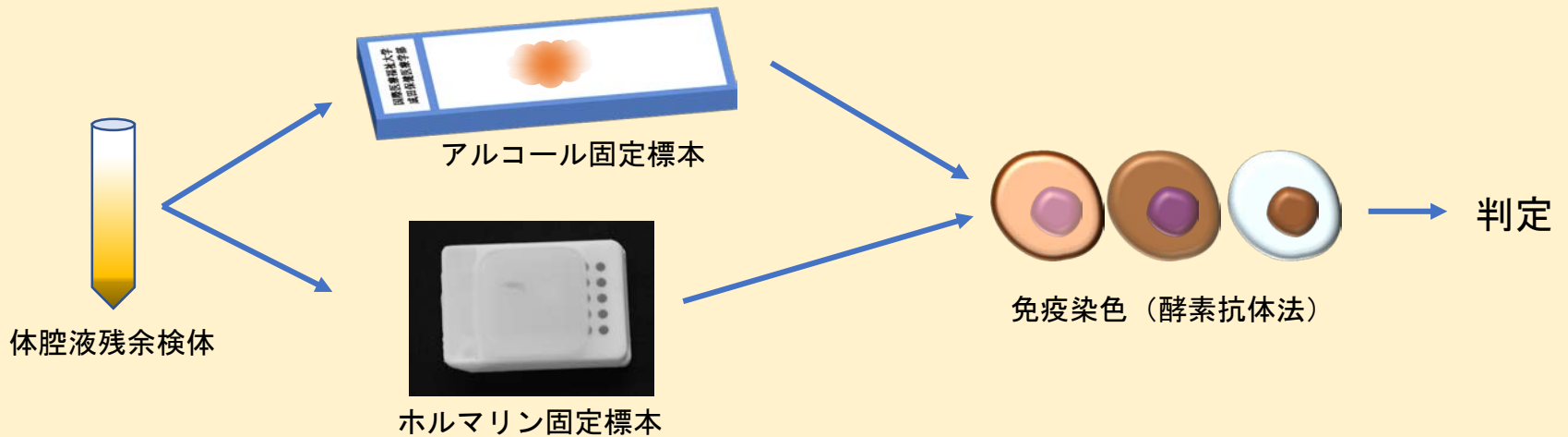
## 【目的】

腫瘍細胞の確認が可能である細胞診検査では、良悪性の判定のみならず、原発巣の特定、組織型推定を要求されることがある。なかでも手術不可能症例や、生検による病理組織検査が行えない患者、末期癌患者では、比較的簡便に施行できる細胞診検査が重要な役割を担っている。とくに体腔液細胞診検体においては、免疫染色が頻繁に施行され、原発巣の特定・組織型推定に重要な情報をもたらしている。また、細胞診検体を用いた検討は、今後のがん治療・がん研究へ多大なる貢献をもたらすと考えられる。しかしながら、免疫染色で用いられる抗体は、病理組織検査で用いられるホルマリン固定および凍結未固定材料での精度保証・条件設定がなされているものの、細胞診検査で用いられるアルコール固定での条件設定および有用性は確立されていない。

本研究では、「アルコール固定材料での免疫染色技術および診断法」を確立することを目的とする。

## 【方法】

1. 体腔液残余検体を用いて、アルコール固定標本（以下、AF）, および、ホルマリン固定標本（以下、FF）の2種類を同一試料から作製した。
2. 各々の標本に対して、様々な抗体による免疫染色を施行し、陽性細胞の判定を行った。
3. 判定終了後に抗体種類による差異を解析し、二者に相関が得られない場合は染色手順の変更、抗原賦活処理を施すなど、技術的な側面での検討を行った。
4. 抗体種類による違いを明確にし、アルコール固定標本での有用性を確認した。



## 【結果】

	AF	
	-	+
EMA	3	0
FF	1	49

	AF	
	-	+
IMP3	19	1
FF	12	17

	AF	
	-	+
GLUT-1	12	2
FF	3	42

	AF	
	-	+
CEA	30	2
FF	2	21

	AF	
	-	+
Ber-Ep4	8	1
FF	0	44

	AF	
	-	+
Leu-M1	35	0
FF	5	13

	AF	
	-	+
D2-40	33	0
FF	0	27



	AF	
	-	+
HBME-1	16	1
FF	2	39

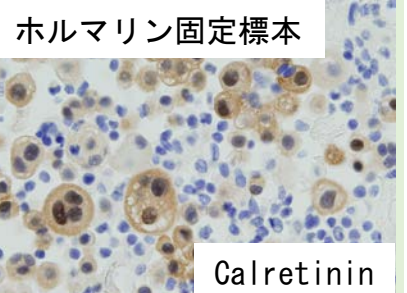
	AF	
	-	+
CK5/6	22	9
FF	9	14

	AF	
	-	+
CK7	2	2
FF	0	28

	AF	
	-	+
CK20	30	4
FF	0	4

	AF	
	-	+
Desmin	27	3
FF	0	28

	AF	
	-	+
CA125	5	3
FF	4	28



	AF	
	-	+
Calretinin	29	0
FF	25	3

	AF	
	-	+
TTF-1	7	0
FF	7	7

	AF	
	-	+
WT-1	18	0
FF	33	2

	AF	
	-	+
MOC-31	8	12
FF	4	30

細胞質の陽性像で判定

AFにおいて抗原賦活化

AFにおいて抗原賦活化

	AF	
	-	+
Calretinin	28	1
FF	2	26

	AF	
	-	+
TTF-1	7	0
FF	1	13

	AF	
	-	+
WT-1	16	2
FF	16	19

## 【考察】

多くの抗体に関しては、FFと同様の陽性率が確認され、AFを用いた免疫染色の有用性が確認された。核内抗原に関してはAFにおいても抗原賦活化が有効であることが確認されたが、例外も存在した。また、FFに比べAFの方が有効な抗体も存在した。

今回の検討より、用いる抗体の特徴を把握したうえで、アルコール固定標本による免疫染色を施行する必要があることが確認された。